

いわかづみ

令和五年六月 第九三号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(12)
- ◇ 民具が語る生活史(民具⑩伊勢暦)
- ◇ 方言一考(さんじらほっけ)
- ◇ モノ言うもの(鐘馗像)
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物(12)

峠を越えた人たち③

独眼竜政宗と大滝友和さん

渡辺 伸 栄

関川村を駆け抜けた伊達政宗

天正十八年(一五九〇年)の夏。

砂塵を巻き上げて、百騎の軍団が関川村の街道筋を駆け抜けた。米沢城主伊達政宗の一団。

国境の大里峠を一気に下ってきた。六十九年前に曾祖父の植宗が開通させた峠。それを偲ぶ余裕はない。政宗は急いでいた。

小田原城攻撃中の豊臣秀吉から会津にいた政宗へ、再三の参陣命令が届いていた。しかし、政宗はぐずった。出発を延ばしに延ばした。

秀吉の命に逆らい、勝手に会津を攻め取った政宗。あわよくば小田原の北条氏と手を結び、秀吉に対抗したかった。が、北条の敗北は目前。政宗はついに、秀吉に従うことを決意した。急がなければ、小田原城が落ちてからでは、参陣したことにならない。

初めは、会津から関東へ向かった。大内宿のある日光街道。関東への最短ルート。だが、そこには、敵方となった北条勢がいて、引き返した。

やむを得ず、本領の米沢城へ戻り、十三峠を越えて、越後路から小田原へ向かったのだった。

政宗の越後迂回には、別説がある。

秀吉から罰せられるのは分かっていたから、わざと小田原到着を遅らせたのだと。少々無理があるかも説だ。

ともかくにも、関川村を駆け抜ける伊達政宗は、生死の狭間にいた。



大河ドラマの名場面

昭和六十二年放映の大河ドラマ「独眼竜政宗」。三十七%超の高視聴率をマークしたという。

今も忘れられない名場面がある。小田原に駆け付けた政宗と秀吉の対面。渡辺謙と勝新太郎の迫真圧倒の演技。

真っ白の装束で平伏する政宗。その首に、弓折れの指揮棒を当てて「もう一日遅れたら、ここはつながってなかったぞ」と恫喝する秀吉。「お怒りごもつとも。死を覚悟して死装束で参上しました」と、吠える政宗。

今思い出してもゾクゾクとする名場面。昔の大河は重厚だったな。それに引き換え、今の大河ときたら・・・オツと、それは言うまい。

ともあれ、この潔さと豪胆さを秀吉に買われて政宗は許され、死罪を免れた。とはいえ、せっかく切り取った会津は没収。その後、本拠地米沢も没収され、東北の奥地岩出山に移された。徳川の世になって政宗は、仙台に城を構え、そこを城下町として大開発した。

それはさておき、大河ドラマの小田原名場面を見て、誰一人、政宗は関川村を通ってここへ来たなどと言う人はいなかった。

ずっと後になって、それを私に教えてくれたのは、かつて関小学校にも勤めたことのある大滝友和さんだった。



朋友大滝友和さんのこと

友和さんとは、若い頃から郷土史教育の研究仲間、同志だった。

彼が教材開発した「岩船潟の開拓」と、私が開発した「青砥武平治と三面川の鮭」は、今でも当郡市郷土史教育の双璧だと自負している。互いの家に泊したり飲み歩いたり、結構遠慮なく何でも言い合った。

双方退職して、私が上関城主三瀧氏の研究を本紙「いわかがみ」に発表した頃、彼は、政宗関川村通過事件を村の広報紙に寄稿した。

「こんな大事件を知らなかったでしょ」と私に言う。彼は当時、芭蕉の出羽街道通過や義経の吉浦海岸通過などを研究し発表していた。「歴史はメジャーでなくちゃ。マイナーな上関城や三瀧氏では誰も面白がらないでしょ」とも言った。

悔しさ半分、広報紙の彼の文章に私は嘔みついていた。下関の渡辺三左衛門家の邸前に政宗が馬を繋いだかもしれないなどと、ちよつとした彼の蛇足に。「友さん、政宗の時代には三左衛門家はまだ無いわ」と。

多少の間違ひは愛嬌の内という顔をして、彼は笑っていた。おおらかな男だった。

「まだ、マイナーなことをやっていますね」。

今、村の広報紙連載の平田家文書解説をみたら、彼は多分そう言うだろう。「歴史は庶民が作る

ものさ」なんて言い返してやりたいなどと、しみじみ思う。早々に逝ってしまった彼に。

政宗、二度目の関川村通過

仙台に移って、政宗と十三峠の縁は切れたかと思いきや、そうではなかった。

去年、歴史館主催「十三峠と宿場歩き」で小松宿を訪ねた。そこに常念寺という寺があった。政宗の宿所ということだったので、調べてみた。慶長十九年（一六一四年）、仙台藩主だった政宗は、徳川幕府から命じられた越後高田城の工事を無事終えて、十三峠を越え旧領米沢の地を通って仙台へ戻ったという。

二十四年前と違って、急ぐ旅ではない。あのときは一気に越えた大里峠。このときは曾祖父を偲び、ゆっくりと越えたにちがいない。

小松で政宗が詠んだという歌

故郷は夢にだにさえ疎（うと）からず

現（うつつ）になかめぐり来にけり

秀吉にはひどい目にあわされたな。裏にそんな感慨があるのかもと、つい思ってしまう。

友さん、二度目のときも三左衛門家はまた無かったわ。会いたいな。ゼロポイントフィールドで会えるだろうか。

6月中旬、佐藤教育長が「これが屋根裏から出てきたんだけど…」と、見るからに年代物の冊子を事務室に持ってきてくださいました。形は折本(屏風折)形式です。(写真参照)

表紙を一枚開くと、江戸時代の年号があり、なにやらびっしり書かれています。順々に折本を開いていくと、どうも一年間の月日が書かれているようです。書いた方でしょうか、「伊勢度會郡(わたらいぐん) 山田 中北外記(なきたげき)」という名前が見られます。

そうしますと、この折本は、「伊勢暦(いせごよみ)」で間違いないようです。



折りたたんだ状態で、縦 26.3 cm・横 8.1 cm
文政十年の伊勢暦 (写真)

当館の古文書解説講座で、参加者のみなさんと2冊の「道中記」を読みました。この2冊はいずれも関川村で生活を営んでいた先人が、江戸時代に実際に旅をし、その道中を記したものです。江戸時代後期になると世の中が安定し、一般庶民も旅を楽しむようになります。いくらが盛んになったといってもこの時代、庶民の移動に厳しい制限が設けられていたのもまた事実です。そのような情勢下で庶民に許された旅は、多くが信仰を目的とするものでした。様々な聖地の中でも「一生に一度は行きたい！」と憧れを集めたのが「伊勢神宮(正式には「神宮」)」です。

江戸時代、伊勢信仰は全国各地に広がりました。その信仰を推し進めたもののひとつに、「御師(伊勢神宮では「おんし」と呼ばれます)」の存在があります。伊勢神宮の御師は地域ごとに担当者が決まっています。年末に信者の家を訪問し祈禱(きとう)を行います。その際に配られるのが、神宮大麻(じんぐうたいま、いわゆるお札)と伊勢暦でした。また、信者のために参詣や宿泊を世話するのもこの御師でした。御師は各地で伊勢信仰のありがたさを宣伝し、ツアーコンダクターも担います。伊勢講という共同積立金の指南者でもあった、という研究もあります。伊勢信仰が全国に広がったのも納得がいくような気がします。

伊勢暦に話を戻しますと、江戸時代の暦は月の運行を主としたもので、例えば月は、大の月(30日)と小の月(29日)の2通りでした。どの月が大の月か小の月かはその年によって異なり、暦は非常に大事でした。また伊勢暦には八十八夜や二百十日などの農事に関する記載があります。農事暦は貴重な情報であり、作の良し悪しが生活に直結する庶民を喜ばせたであろうことは想像に難くありません。来年の暦を知りたい様々な地域の人に、ありがたい御師や代理人の手代から年末に確実に配布される伊勢暦、これは人気のお土産でしょう!

さて、当館に持ち込まれた伊勢暦は、文政9(1826)年と文政10(1827)年の暦で、いずれも伊勢神宮門前の山田の暦師、中北外記によるものです。暦師は暦の出版者で、中北外記家は江戸時代を通じて伊勢暦を発行していました。明治政府により明治4(1871)年7月に御師制度は廃止されます。中北外記はその後、伊勢神宮暦や神宮大麻を製造する製紙会社に関わられたようです。

なぜ佐藤家の屋根裏に文政9・10年の伊勢暦が大事に仕舞われていたかはわかりませんが、当地への伊勢信仰の広がりや篤さを示す、貴重な資料と考えられます。(田村舞子)

参考文献 金森敦子二〇〇四『伊勢詣と江戸の旅』文藝春秋、民具学会編一九九七『伊勢暦』『日本民具辞典』ぎょうせい出版

方言一考・さんじらほつけ

「さんじらほ(つけ)にする」はやりかけたことを途中でやめて散らかしたままにする、という意味だ。「さんじらかす」という動詞もある。独特な言葉で耳に残る方言だが、その語源は推測し難い。意味からして「散じる」と「ほつたらかす」が合わさった言葉のようだ。つまり「散らかしたままほつたらかしにする」。ただ異説もあって、昔村上藩の飛地であった三条の商人がいい加減な勘定をしていたことから、とか、三条の商人が金持ちであったので、村上藩の払いを三条に払わせた。「三条払い北さんじよっぱら北さんじらほつけ」などである。ただこの説、「さんじらほつけ」の意味合いから少々逸脱する。週末、道の駅で車のナンバー調査をするK氏は、自分の人生をさんじらほつけにした埋め合わせのつもりなのか、調査の傍らゴミを拾って美化に努めている。大手の会社でうだつの上がない半生を鬱々と過ごし、趣味の登山にも本腰を入れられなかった屈託の代償をこういう奉仕に求めているようだ。芍薬園も同様であろう。菅笠を被り(婉曲的に言っても)見栄えのしない恰好で、車と人の間を縫うように歩く姿は、懺悔の虚無僧に見えなくもない。そういえば昔尺八を習っていたこともある。その尺八をゴミ拾いのトンダに代えて、他人のさんじらほつけを嘆きつつ今日も徘徊するのである。(安久)

モノ言つもの・谷文晁作「鐘馗像」

高値で売買される人気作家の作品は贋作が多いそうだ。良寛ばかり、文晁ばかりである。三万円以下の良寛は偽物だと聞いたことがあるし、鑑定番組に登場する文晁は九割方贋作となる。良寛の筆致は独特で似せ易く、弟子の作品でも良い出来なら文晁自身が落款を押したのが贋作の多い理由らしい。渡辺家から「鐘馗像」を借りて展示しているが、そういう先入観で見ると、刀の描き方がぞんざいだとか肩に結んだ紐が杜撰だとか、難癖をつけたがる。しかし、それこそが文晁の画風であろう。つまり、強調して精緻に描く部分とそうでない部分を描き分けるのである。朝夕開閉館時の計四回、この掛軸の前を通る度、私は手を合わせる。荘厳さに打たれ、文晁の息遣いさえ感じて、素通りできないのである。鐘馗は疫病を退散する神、三年余手を合わせた結果、昨今の疫病蔓延もようやく落ち着いてきたように見える。霊験あらたか、とはこのことか、感謝の気持ちで今日も手を合わせる次第です。(安久)



歴史館行事の報告

○春の健康登山「日本国」 4月22日(土)、参加者26名、みんなで日本の頂を満喫しました。

○古道を歩く① 5月20日(土)、参加者21名、ヒル総数138匹。ヒル賞3位までの方へはその頑張りを称え館長よりアイスが進呈されました。

○平田大六家住宅見学会

5月18日(木)、参加者10名。参加者はご当主の軽妙な語り口に耳を傾け、楽しいひと時を過ごすごとができました。



○古文書解読講座(4月〜6月) 引き続き、宗門人別帳や取替手形を読んでいます！

お知らせ

○村民ギャラリー「町野美和子とその仲間展」旧女川小学校に空想的で面白い絵が飾ってありました。中東山の会の縁で、村上市の町野美和子さんが寄贈してくれた作品です。今回のギャラリーは、そんな町野さんとお仲間の独創的で空想的な作品を展示します。会期：7月15日(土)〜9月24日(日)、月曜休館・月曜祝日の場合は翌火曜休館、観覧は無料です。

いわかがみ 第九三号

発行日 令和五年六月

編集発行 せきかわ歴史とみちの館

tel:0254-64-1288 Fax:0254-64-0300